文芸部第三回リレー小説　三番手：ギブスンジュニア

 冬野稔が言ったことには、数日前に林檎に溺れる白昼夢か白昼夢と錯覚させるような夢を見たということだ。実際にそれを見た正確な日は分からない、彼女はそれについて全く言及しなかった。病に倒れていたときに見たのか、それともその後に見たのか。午屋は推理しようとし、それが上手くいかなかったため、と言っても上手くいったためしなど無いのだが、とにかく思考の濁流を方向付ける論理の岸辺が決壊したために、次に想像力を働かせようとし、しかしそれにも失敗した。想像力が上手く働いた時には何が起こるかというと、彼の頭の中に、夢にうなされる稔の白い顔とか、冷たい夜の恐怖とか、そういった物からは程遠い迫真に思える図像が浮かぶのだが、この時彼の想像力は静まり返っていて、結局彼が思い描けたのは、冷淡な疑惑だった。だから彼は、結局彼女の話の真偽の程は定かではない、と考え、ただ、例え嘘でも真実でも、陳腐なことには変わりはない、と感じ、そう感じていることに気付きながら彼女と会話していた。無論午屋はそんなそぶりは少しも見せなかった。稔がにこやかに話しているのだし、あくまで感じ良く、しかしそれほど興味を引かれていないことを、何気なく態度で示していた。その時の（というより、常に）午屋は本当は、興味を引かれたい、夢中になりたいと思っていたのだが、望んでいるのにそれを叶えない稔の長い話は、逆に驚かされるほどだ。素晴らしい。信じられない。しかしそれは言いすぎだ。結局のところこれはありふれた話だし、だから私たちは容易にそれを信じることができる。

　しかし話を聴いている午屋には別だ。時間が湯水のように消えてなくなっている実感が、彼を、信じられない！、という気持ちにさせる。しかも彼は話を聴くだけではなく、話に実際に登場すらしている。彼は自分が登場している部分に耳を傾けて、その光景を思い浮かべて、何て間抜けな顔なんだろうと感じる、台詞が何度もリフレインする。しかもその声には、奥から聴こえてくる、という感じが全く無い。彼は、洞窟ほど暗くも深くも無くていいから、せめて喉の奥から、歯と舌の後ろから聴こえて欲しいと思っているのだが、実際の台詞はというと、稔が頬を赤くして、一生懸命に、それはもう一生懸命に喋っているのだ。そうして彼の思い描いた自分はますます間抜けになっていく、しかも本来だったらグロテスクさを隠すはずの滑稽さが欠けている、せっかく夢に相応しいルイス・キャロルそのままといった具合の想像力の使い方なのに、冷凍庫は鏡張りになっていて、その扉が開かれて中に光が差し込むことで、初めは一つだった林檎が鏡の中に一個、その鏡の中の鏡の中に一個、その鏡の中の鏡の中の鏡の中に一個、その鏡の中の鏡の中の鏡の中の鏡の中に一個といった具合にその数を増やししまいには無限個にまで膨れ上がって（光の速さを考えると、ここまでは一瞬だ）、そしてそのまだ凍りついた林檎達が滝のように溢れ出て、それに呑み込まれる、こんな風に完全にルイス・キャロル風なのに、いったいグロテスクさを動的な想像力で固定して面白みに変える、あの想像力はどこへ行ったのだろう、何故あの力だけが消えて、想像力が、光景が、イマジネーションが、彼女の夢に姿を現したのだろう、そう午屋は自分に問いかける、そしてこう結論する、多分映画を見すぎたんだな、俺も（本当に相応しい言い方！）冬野も、それかアニメか、ドラマか、動画なら何でもいいが、そこで親しみすぎたんだな、あの映像に、ショッキングな光景、俺達を麻痺させる光景だ、不思議な液体を飲んだアリスの体が膨れ上がって、体だけではなく衣服も髪留めも膨れ上がって、その後に今度は扉にちょうどいい大きさまで縮むあの光景に、膨らんで縮むあの一連の動きに、夢中になりすぎたんだな、アリスの服の色と同じ色の、魅惑の光線を目のみならず顔いっぱいに浴びて、画面に釘付けになっていた、本当に釘で打ち付けられたみたいに、そんな幼年時代を過ごしたのが悪かったんだな、現代ではセクシャリティが色々取り沙汰されたり精神鑑定が必要だと思われたりするであろう変人ルイス・キャロルが姪だったか何だったか忘れたが誰か少女のために書いて残した物語、というよりも物語の因果の光、俺達が思っているよりも随分力強い光を、火照る頬に感じながら、大判の本を開いたのが悪かったんだな、誰かが冗談交じりに言っていたように、映画化された本なんてまったく読む必要が無かったのに、少なくとも夢中になって読む必要なんてまったく無かったのに、それを読みふけったのが悪かったんだな。

　しかし彼は重要なことを見落としている、そうなのか？、ああそうだ、君は見逃している、だがそれも仕方の無いことなのかもしれない、よく考えて欲しい、夢の光景では、そもそも午屋は扉の向こうにいる、全ては稔の部屋で起こった、だから稔からしてみれば君とは声で、声に過ぎない、君に目は無い、者を見る目は無い、林檎の濁流の向こう、柔らかそうな扉の向こうから聴こえる声、つまらないことを囁く声、これが真実だ。つまり君は初めから隔たっていたのだ、午屋からはそもそも何も見えなかったのだ。

　しかし些細なことだ、彼の命はあと数十秒、彼女が目を覚ますまでの時間しかない。風前の灯になった声は、見えるものは濁流のような林檎のイメージだと、欲望だと、彼を見つめる大きな瞳、ルイス・キャロルの描く膨れ上がったアリスの巨大な瞳だと言う。